

February
2017

No. 24

赤レンガ通信

豆のつながり

北海道
www.pref.hokkaido.lg.jp



豆のつながり

牧草をはむ牛。緩やかな起伏を描く緑の丘。ゆっくりと回る風車。アメリカ・カリフォルニア州のトレーシー市に入ったとき、そのような光景を前に、北海道に戻ってきたような気がした。正月休みにアメリカへ帰省した際に、北海道・芽室町と姉妹提携をしているトレーシーを訪れた。1月12日、芽室とトレーシーの姉妹提携調印に向けて活躍したケン・ヤスイさんと妻のハリエットさんに会うことができた。

トレーシー郊外に、ヤスイ夫妻が毎週通う小さなベーグルサンドイッチのお店がある。ハリエットさんは店員の名前を全員覚えて、仲良く会話をしていた。注文する前に、店員がいつものサンドイッチを持ってきた。ハリエットさんはとても優しく、しっかりした印象の人だ。ケンさんは人を引きつけるような笑みを絶やさぬエネルギーを持っており、喜んで色々話してくれた。彼らの話に魅了された私は、

自分のサンドイッチを帰りの車内で食べる羽目になってしまった！

既に引退しているが、ケンさんはトレーシー市豆類協会でも活躍した方で、日本にも取引先がたくさんあった。トレーシー市長から姉妹都市候補を探すように依頼されたケンさんは、その豆のつながりを通じて芽室にたどり着いた。当時(1980年代)のトレーシーと芽室は共に農業が盛んで、豆やトマトなど主な生産物も似ていたため、ケンさんは芽室を市長に勧めた。姉妹提携に向けても、また、提携調印後も、ヤスイ夫妻が同市の交流になくはない存在となった。二人が今も市民に愛される、地域の中心人物であることが、私にもよく分かった。

トレーシーと芽室は1989年の姉妹提携以降、文化、料理、農業など様々な交流をしてきた。トレーシーで行われたビーンフェスティバル(豆まつり)への芽室訪問団の

参加や農業従事者の相互訪問、芽室ベアーズというソフトボールチームのトレーシー訪問もあった。トレーシーにはソフトボールチームがなかったため、その一試合のためだけにチームを結成したが、試合は芽室ベアーズの圧勝だった。

様々な交流の中で、一番重視してきたのは、やはり青少年交流である。中学生がお互いの地域を訪問しており、ホストファミリーと暮らし、学校へ通い、部活に参加し、文化について学んでいる。トレーシーから来る中学生の中には、日本のことを知りたい日系人も多らしい。

トレーシーからは生徒だけでなく、教員も派遣されており、英語指導助手(AET)として芽室で働くトレーシー市民が

いる。ヤスイ夫妻は必ずその候補者の面接を行い、選ばれた AET たちとの関係を大事にしてきた。今回の「北海道 JET スポットライト」で紹介するジョシュ・ウレリーさんも、かつてトレーシーからの AET だった。北海道が好きすぎて、今度は JET プログラムで北海道に戻ってきたのだ！

豆とトマトから、現在の力強く活発な青少年交流プログラムまで、トレーシーと芽室の姉妹関係は盛況である。ヤスイ夫妻とお話してきたことは光栄だった。ヤスイ夫妻のような人々がいるからこそ、両地域の友好関係や相互交流が大きく育つ。この姉妹交流の広がりが、これからどのように深まるのか、とても楽しみだ。

トレーシー市

サンフランシスコ市の東に位置する。人口は約 80,000 人で、現在も増加し続けている。1980 年代までは、豆やトマトなどの生産を主とする農業地帯だった。

芽室町

北海道東部にある人口 18,900 人ほどの農村地帯。北海道東部は広い大地での農業が盛んでおり、芽室も豆などの生産を中心とする農業で長い歴史を誇る。

トレーシー市の姉妹都市協会について詳しく知りたい方は、ホームページをご覧ください。

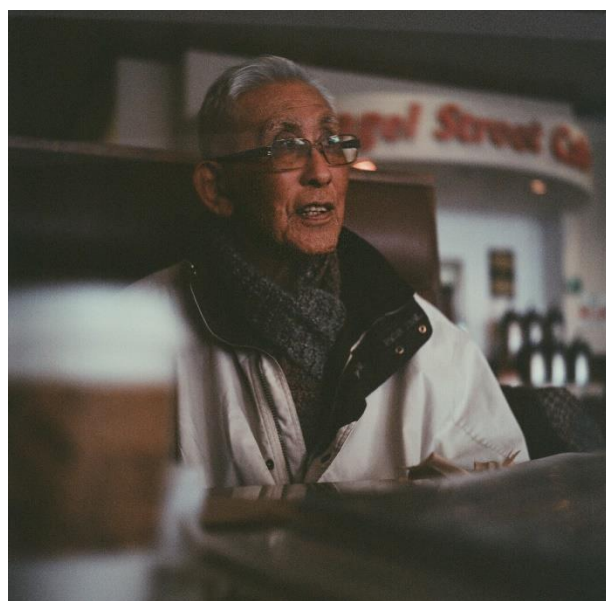
<http://www.tracysistercity.org/>

ヤスイ夫妻との面談の機会を与えてくれたトレーシー市姉妹都市協会のシンディー・サンフォードさんと元芽室町 AET ジョシュ・ウレリーさんに、この場をお借りして御礼申し上げます。

— 面談の様子 —



トレーシー市にある姉妹都市公園



ケン・ヤスイさん



トレーシー市と芽室町の姉妹都市提携調印式への招待状



ヤスイ夫妻についての新聞記事



トレーシー市姉妹都市協会のシンディー・サンフォードさんとエミリー・シュースター交流員



姉妹提携についての写真、新聞記事などはこの本で大切に保管している。



芽室町の夏の様子
(写真：ジョシュ・ウレリーさんより)



芽室町の冬の様子
(写真：ジョシュ・ウレリーさんより)



北海道 JET スポットライト



北海道にはアメリカ、カナダ、シンガポール、中国、韓国、ドイツ、フランス、ロシアなどから約250人のJETプログラム参加者(外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員)がいます。赤レンガ通信ではたくさんの国々からやって来て現在北海道で暮らす人たちのストーリーを伝えていきます！



MEET JOSH ULLERY...



北海道は初めてではないですね。最初に北海道へ来たきっかけは何ですか。また、北海道へ戻ってきたのはなぜですか。

A 北海道で暮らすのは今回で2回目です。カリフォルニア州中部のセントラル・バレーで生まれ育った僕が北海道まで来て働く機会を得られると、いったい誰が考えたのでしょうか。この素敵な島へ来ることになったのは、カリフォルニア州トレーシー市と北海道芽室町の姉妹都市交流プログラムのおかげでした。そのプログラムでは、トレーシー市を代表して芽室で働く英語指導助手(AET)を募集していたのです。我が家にホームステイした日本人留学生がアメリカの生活を体験したように、日本の生活を体験できる一生に一度のチャンスだと、僕は思いました。

芽室で4年間の任務を終えた後、十勝の豊頃町で5年間 AET の仕事をしました。豊頃で今の妻と出会い結婚しましたが、2011年に特殊教育の仕事に就くため、僕らはアメリカのネブラスカ州へ引っ越しました。それから5年たち、家族のため、そしてキャリアアップのために、北海道へ戻りたい気持ちが強くなりました。7歳の息子(ウイリー)と3歳の娘(ケイティ)がいます。日本とアメリカの親戚とのコミュニケーションはとても大事なことなので、子供たちは英語も日本語も話せる必要があります。

教育のキャリアを考えて、北海道へ戻ってきた理由は2つあります。一つ目は、将来校長になりたいからです。日本の学校の取り組みは、アメリカの地方にある小さな学校で活かします。それを自分の目でみたいと思いました。もう一つは、日本の学生の英語力を伸ばす手助けをしたいからです。自分の経験を活かして、日本人の英語の先生の力になりたいと思います。

二つの地域に住んだことがありますね。それぞれ好きなところはどこですか。

A 十勝に9年いましたが、一番気に入ったことは何でもすぐに手が届くことでした。当時はまだ若く暇つぶしが必要だったので、野球やバスケ、ボウリングのチームなどに入っていました。今は大人になりましたので、猿払村の落ち着いた生活が好きです。市街地をぶらぶらしたり家族と過ごす毎日を楽しんでいます。夜はしょっちゅう、息子と野球の練習をしています。それ以上にしたいことはありません。窓のすぐそばにシカ5頭が座っているなんて、猿払以外どこで経験できるでしょう？そんな北海道が大好きです！

北海道で一番印象に残っていることは何ですか。

A とても難しいですね。北海道での生活を振り返ると、仕事と私生活、2つの面があると思います。仕事で一番印象に残っているのは、十勝の先生たちと一緒に参加した、夏の全道スポーツ大会です。何年も一緒にプレーし、優勝した次の年に準優勝、ということもありました。先生たちが自分を受け入れてくれたことは、一生忘れられません。

プライベートで印象に残っていることは2つあります。一つは、芽室で元横綱の大乃国関から浴衣をもらったことです。大乃国関の弟子が必ず着る浴衣を自分も着ることができ、とても光栄でした。豊頃で最も思い出深い日は、2008年5月9日です。その日、妻と結婚しました。結婚生活もそろそろ9年になります。

ウレリーさんは家族 4 人で北海道北部の猿払村に住んでいます。JET プログラムで ALT の仕事をしながら、地域のリーダーとしても積極的に活躍しています。